

2018 年度理工学研究科・工学研究科
「教育・研究等改善アンケート調査」公表のためのコメント

教育・研究等改善アンケート調査の結果について

1) 教育・研究等改善アンケート調査の目的

- ・理工学研究科の授業評価アンケートは、学部学生向けの授業評価とは視点を変え、研究指導等についての学生満足度評価の色彩を強めた設問により、研究指導体制や研究教育環境の改善に資する項目にしている。協力いただいた大学院生には感謝したい。

教育・研究等の改善を高めるための自己点検活動・FD活動の一環としてここに公表する。

2) 調査方法、調査実施時期

- ・アンケート調査は、回収率を高めるために、教員による配票・回収により実施した。
- ・配票・回収期間は以下の通り。
- ・調査回収時期は 2018/11/24～2019/1/11 で実施した。

3) 回収結果

- ・博士前期課程については在籍者 115 名（2018/11/1 時点）のうち、101 名（回収率 87.83%、昨年度 90.3%）の回答を得た。1 年生 56 名、2 年生 45 名である。
- ・博士後期課程については在籍者 12 名（2018/11/1 時点）に対して、回答者が 9 名（回収率 75%、昨年度 45.4%）であった。

すべての項目について高い評価を得ているが、個人が特定される可能性を配慮し、詳細の公表は行わない。

4) コメントおよび対応

①大学院進学情報提供

- ・博士前期課程への進学理由の第 1 は「研究内容への関心」、第 2 は「就職に役立つ」である。昨年まで長く、第 2 は「担当教員におそわりたい」であった。就職に関しては、研究指導教員はもとより、「キャリア形成支援・就職支援室」との協力関係を密にするなど、就職支援を継続していく。
- ・「大学院進学を考えるのかんがえるうえでどのような情報が一番役立ったか」との問いで、博士前期課程で 46 名、博士後期課程で 7 名が、「研究室教員の紹介」と回答しており、教員の影響が大きいことが分かる。
- ・大学院進学決定時期は、4 年次が一番多いが、3 年次に決めたものも多い。研究科・専攻別進学説明会に加えて、各学科の進級ガイダンス、教員から個別の大学院進学説明会を継続して行く。
- ・学部生に大学院の教育研究の魅力を伝えるイベントとして、毎年秋に川越フォーラムを開催している。学部 3～4 年生を中心に積極的に参加を促すような取り組み内容にしており、学部生の父母にも案内を送った。併せて、都内の日本語学校にも開催案内を送り、本学進学希望の留学生数名が参加した。
- ・2015 年度から学部と大学院の連携を強化する目的で導入した先行履修制度の実績は、2018 年

度は23名(72科目)であった。この制度は、大学院進学予定者の多くが活用している。

- ・博士後期課程への進学理由の回答は、「研究内容に対する関心」「担当教員とのかかわり」の順となっている。

②研究指導に関する評価

- ・博士前期課程の研究指導に対する評価は、おおむね知的満足度を得られたとの評価である。プレゼンテーション能力、専門的知識、情報収集能力が獲得できたとの評価である。
- ・博士後期課程の研究指導についても、博士前期課程とほぼ同様の高い評価であった。

③授業科目に関する評価

- ・授業科目に対する評価は、例年と同様に、おおむね高い満足を得ている。講義の進捗は「適切」との評価が多いが、少数ではあるが早いとの指摘もある。少人数教育であるため、履修生の状況を確認しながら講義を進めていく必要がある。開講科目数については、「十分」又は「足りている」との回答が多い反面、「少ない」「増やして欲しい」という要望が10名あった。

④研究室等の施設環境

- ・研究室・実験室の機器やPCの充実について、「充実している」「まあ充実している」が81名、「どちらかといえば不足している」「不足している」と回答したものが8名であった。指導教員が研究室ごとに事情を把握し、適切に対応できるように努力していきたい。

⑤研究発表活動支援

- ・博士前期課程で67名(昨年度67名)、博士後期課程では5名が学会発表を行っている。そのうち博士前期課程47名(昨年度34名)は複数回の学会発表を行っている。論文採録数は、博士前期課程では22名(昨年度18名)、博士後期課程では1名が「実績あり」としている。受賞歴も博士前期課程で6名(昨年度5名)ある。研究発表活動は活発に行われている。
- ・学会発表等の支援については、研究発表奨励金制度の充実した環境により、学会発表経験者のほとんどが、おおむね良い経験になったと回答している。この制度の利用者の約半数が、自己負担なしで発表できている。その一方、交通費・宿泊費の2割以上を自己負担したと指摘する学生が、回答者の約2割(博士前期課程13/59、博士後期課程1/2)を占めており、昨年度とほぼ同数となっている。
- ・博士前期課程で40名、博士後期課程で6名が学会発表をおこなっていない実態があり、来年度の専攻長会議で協議を行い改善に努める。
- ・研究発表にあたって関連して、研究が思うように進まないと回答した学生が博士前期課程で19名(昨年度14名)、博士後期課程で2名であった。昨年度と比較して、若干増えているため、指導教員や先輩・後輩との日常のコミュニケーションの中で研究推進に努力してほしい。英語の質疑ができない、英語の論文が書けない、との指摘については、サイエンス・イングリッシュ特論の履修や研究科主催の英語ワークショップ、キャンパス英会話に参加してもらうことで、各自が改善に努めて欲しい。

⑥在職やアルバイトについて

在職やアルバイト日数が、週に4日が5名、5日以上と回答したものが2名であった。社会人入学の院生は博士前期課程で0名であるが、勤務時間もフルタイムが18名となっている。学費や生活費の捻出に必要な対応かどうか確認できないが、研究活動に支障がない状況かどうか、

詳細を確認する必要がある。大学院の教育研究と職場・仕事の両立が困難と回答した学生数が3名おり、上記と合わせてフォローアップが必要と思われる。

⑦TAについて

多くの大学院生がTAを担当している実態がある。大学院生数とTAを必要とする授業科目数にアンバランスがあり、結果として、18名がTA担当について負担を感じていると回答している。TA担当については、依頼する教員と大学院生側の十分な調整が必要である。教育補助を担当することは研究者・教育者としての素養を養うことにも役立つため、前向きに取り組む姿勢を期待している。

⑧総合評価

全体としては、満足している（とても満足、満足、まあ満足の合計）とする評価が92名（博士前期・博士後期課程 87.6%）であるが、不満（不満、やや不満、あまり満足していない、の合計）が5名（昨年度6名）である。昨年度の比べて不満の評価が減少しているものの、個別の評価内容を踏まえて、改善の努力が必要であると思われる。

※平成25年度以前入学生は工学研究科、平成26年度以降入学生より理工学研究科の所属である。

以上

2019年3月1日

理工学研究科長 吉田善一